

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

興味・関心が高まる工夫～オタマジャクシ～／二本松市立小浜幼稚園（福島県）

子どもたちの生き物への関心を高めたり、興味を深めたりするために、どのような環境の工夫をしていますか？

今回は、保育者が、子どもたちの生き物への興味を深める環境の工夫を明らかにしている園の実践をご紹介します。

子どもたちが、4歳児の時に生き物を飼った経験を基に、相手の立場に立って生き物を飼おうとする姿が伝わってきます。

さらに、一人の子どもの考えを友達、保育者、保護者が共有し、認め合う体験が、「科学する心」の育ちには、大切であることを読み取ることもできます。



「オタマジャクシの飼育を通して」／5歳児

「いろいろな生き物との触れ合いを経験し、いろいろな発見をして欲しい」と保護者がオタマジャクシを園に持ってきてくれた。4歳児の時に、いろいろな生き物や植物との体験活動を経験していることもあり、クラスでオタマジャクシを飼うことにする。すぐにSちゃんが、「いっぱい触ると死んじゃうんだよ。だから触らない方がいいんだよ」と言い出す。昨年、意図的に直接触れられる環境を作ってきたことで、オタマジャクシを手に乗せたり追いかけて回したりしたせいか、オタマジャクシが全部死んでしまった経験がとても印象的だったようだ。子どもたちの中には、オタマジャクシに触りたいという気持ちがあるようだったが、Sちゃんの発言がきっかけとなり、みんなで話し合い、手では触らないようにしようと決まる。

✦ 環境の工夫



虫メガネは、使いたい時にすぐに使えるように水槽の近くに置く。



より関心が高まるように、オタマジャクシの成長の様子を掲示する。



絵や製作で表現したい思いが実現するように素材・材料を設定する。





オタマジャクシをより身近に感じ関心が高まるように「おたまじゃくしの101ちゃん」（作・絵：かこさとし/偕成社）などの絵本や、図鑑の設定を工夫する。

♪オタマジャクシ♪

オタマジャクシの様子が少しずつ変わってきて毎日新しい発見があって大さわぎです。登園すると、オタマジャクシの飼育ケースをのぞいては、「足が出てきた！」「足がびよーんって動いた！」「手はどうやって出るのかな？」「しっぽはどうやってなくなるの？」子どもたちの『どうなるんだろう？』『不思議だな・・・』がたくさんみられます。小さな変化や発見がたくさんある度に、誰かに知らせたい！伝えたい！そんな毎日です。園長先生を呼びに行ったり、いちご組さんに教えてあげたりしています。「カエルになったら逃がしてあげようね・・・」とクラスで話をしながら毎日、カエルになるのを楽しみにしています。

✿ 「カエルになる練習！」

● オタマジャクシがやってきた

Mちゃんは朝からカエルの飼い方が載っている本をじっとみていた。

保育者は、「そろそろ足も出てきてオタマジャクシの容器はこのままでいいのかな…。カエルになったら深い容器の方がいいのかな…」と、考えて深めの飼育ケースを準備する。

Mちゃんは、その飼育ケースをもって砂場に行き、砂を入れ始める。

保育者：「Mちゃん、どうしたの？」

Mちゃん：「あのね、カエルになる練習するの！ピョーンってやる練習するの。（だから）砂を入れるといいんだって！！」

保育者：「なるほど！砂があると砂の上を歩けるからジャンプの練習ができるんだ。いい考えだね」
その後、水も少し入れてオタマジャクシを新しい飼育ケースに移してあげる。

Mちゃん：「ピョーンって跳ぶ練習するの！本に載ってたの。お水だけじゃなくて土を入れてあげるんだって」

Yちゃん：「ジャンプの練習？カエルになれるように？！すごいね！」

保育者は、クラスみんなに新しいオタマジャクシの家ができたことを伝える。

保育者：「あのね、Mちゃん、ジャンプの練習ができるように砂を入れたんだって。いい考えだね（いい考えだね！ってお友達に認められてMちゃんも嬉しそうだな。もっといろいろな人にもMちゃんの考えを伝えたいな…）」

Aちゃんたち：「Mちゃん、すごい！！いい考えだね」と、認める。

Bちゃん：「新しいお家ができてよかったねえ」

保育者：「Mちゃん、カエルになったらジャンプができるように水の中に砂も入れて水と陸地と両方作ってあげたんだって！」

Sちゃん：「カエルになる練習？」

Oちゃん：「そうか！カエルはピョーンって跳ぶもんね」

しばらくじっとオタマジャクシの様子を見ている。

砂の上をオタマジャクシが歩き出す。

Mちゃん：「歩いてる！！」

Yちゃん：「よかったねえ！Mちゃん！」

Mちゃん：「やっぱり…！」



● 次の日

保育者は、登園してきたMちゃんの母親に昨日のMちゃんの様子を伝え、クラスまで来てもらい、Mちゃんが考えたオタマジャクシの家を見てもらう。

Mちゃん：「お母さんあのね。ジャンプする練習のところ作ったの」

Mちゃんの母：「うわぁー！すごい！Mちゃん考えたの？すごいねえ！」

母親に考えをたくさん認めてもらい、とても嬉しそうなMちゃんだった。その後、クラス便りで、保護者にもオタマジャクシの様子、子どもたちの関わりの姿を伝える。

● その後

オタマジャクシを取り出して歩く様子を観ていると…。

Cちゃん：「ピョーンって跳ばないねえ…」

Dちゃん：「まだ赤ちゃんだからじゃない？」

Cちゃん：「黒いからまだカエルじゃないね…」

Dちゃん：「まだ、ジャンプできないから、こんな歩き方だったよ！」

保育者は、カエルの動きを体を使って表現する姿を受け止める。

(伝えたい時は、言葉だけじゃなくて体の動きも自然に出ることが分かった)



+ 考察

- 去年、オタマジャクシの飼育に失敗した経験をした子どもたちの新たなスタートだった。子どもたちなりに自分たちで考え、約束を決めて大事に飼育することができた。昨年の経験を全体で共有し生かすことができた。
- カエルやオタマジャクシの載っている本や、虫メガネ、飼育ケースの置き場所など子どもたちが朝、登園すると目に付く場所に環境構成したことで、関心が高まったような姿が見られた。子どもたちの興味・関心を捉えた環境の工夫をする必要があることを実感した。
- オタマジャクシの様子を掲示したり、絵に描いたり、クラス便りで保護者にも伝える工夫をしたことで、保護者にも興味をもってもらった。また、子どもの小さな気づきをみんなで共有する環境として有効であったのではないか。
- 子どもが気が付いたこと、考えたことを保護者や周りの友達に伝え、みんなから認められる機会を作ったことで、さらに興味が深まっていった。
- 気が付いたことや感じたことがあると誰かに伝えたいくなる。言葉だけでなく、自然と体を使って表現したり、絵などで表現したり等、いろいろな方法で伝えようとする事が分かった。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム
幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」